名詞目的語と任意添加語の規範的語順規定について

羽根田　知子

1　文の要素の分類と問題点

本稿は，ドイツ語学習者がドイツ語作文する時などにしばしば疑問を抱く語順の問題のなかで，名詞の目的語と副詞的規定語が同時に現れる際の語順を例に，移動しうる文肢の語順についての規範化を試みるものである．語順の記述には，文の要素を一定の範疇に分ける必要があるが，その分類の仕方や用語は，何を基準にするかによって異なってくる．本来は，それぞれの文法の枠組の中で論じられるべきものであるが，ここでは，代表的な文法で用いられている分類の仕方を概観し，学校文法において，ある程度統一させる必要性を示唆するものである．

「文の核というべき一つの出来事，また一つのありかた」は「述語によって表される」[1]が，何を述語と見なすかによって，他の範疇の扱いも変わってくる．述語［述部］とは文から主語［主部］を除いた残りの部分であるという論理学上の概念にならえば，非常に広範なものとなり，いわゆる添加語のような任意文肢も述語に含まれることになる．一方，狭義の定義としては，述語とは分析的語形成の動詞の定形と不定形であるというものもあり，この場合，話法の助動詞と結び付く不定詞は述語に含まれない[2]．一般的には後者の概念をもう少し広くしたものが採られているものの，どこまでを述語に含めるかについては，文法書によって少しずつ違っている．

ドゥーデン，シュルツ／グリースバハ，ヘルビヒ／ブッシャの文法[3]は，一つの部分から成る述語と複数の部分から成る述語に分けている点では共通している．例えば文例(1)の述語は一つの部分から成り，(2)の述語は複数（二つ）の部分から成っている．

(1) Er *verdient* sein Geld als Maurer.
(2) Er *hat* sein Geld als Maurer *verdient*. (Duden 1995, S.605)

述語が動詞の人称語形と，不定形（不定詞，過去分詞）または主文の単純時制で分離した前綴りから成るものが複数の部分から成る述語と見なされることでも共通している．しかし，人称語形と共に述語を成す要素の呼び方，分類のし方には違いが見られる．

シュルツ／グリースバハでは，主文において第2位に位置する人称語形を第1の述語成分(Prädikatsteil)，それと結び付いて文末に位置する要素を第2の述語成分と呼んでいる．これに含まれるもので，分離の前綴り以外のものは動詞成分に限られる．その他の要素は目的語(Objekt)，述語補足語（Prädikatsergänzung)，任意添加語(freie Angabe)に分けられているが，述語補足語は，場合によって内容・形式・機能という基準を使い分けている点では統一性に欠ける．例えば，(3)では場所の補足語(内容による区別)，(4)ではN格の述語補足語(形式による区別)，(5)では述語補足語としての主語(機能による区別)である．

(3) Mein Freund wohnt *in einem Hotel*.
(4) Dieses Haus ist *ein Hotel*.
(5) Heute findet hier *ein Konzert*.
(シュルツ／グリースバハ　1983年　458ページ)

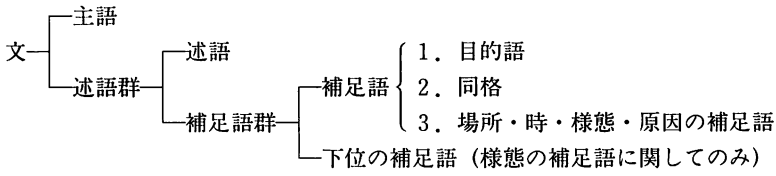
機能動詞結合で機能動詞と結び付く要素に関しても，統一的に扱われていない．それが対格の場合(6)は機能による区別の項で述べられ，述語補足語としての目的語と呼ばれるが，前置詞句の場合(7) a) は場所の補足語(7) b) に関連付けられた上で「比喩的な意味」に用いられたものと把握されている．

(6) Der Arzt macht *viele Krankenbesuche*. (同上書　459ページ)
(7)a) Das Gesetz tritt *in Kraft*.
(7)b) Er fährt *nach München*. (同上書　489ページ)

シュルツ／グリースバハにおいては，述語の概念は統語的位置に基づいて統一されているが，述語のはたらきを分担する要素の分類については，機能動詞結合では形態が第1の基準である一方，述語補足語には意味上の述語が混在するなど，学習者の混乱を招く点が見られる．

ヘルビヒ／ブッシャでは，人称語形と結び付いて述語を成す要素を，文法的述語部分（grammatischer Prädikatsteil）と語彙的述語部分（lexikalisches Prädikat）に分けている．前者は分析的動詞形を成す動詞の不定形及び話法の助動詞と結び付く不定詞[4]で，後者は語彙的，造語論的理由から加えられる要素である．例えば，分離の前綴りや機能動詞と結び付く動詞的名詞（を含む句）は語彙的述語部分である．シュルツ／グリースバハにおいては統語的位置に基づき第2の述語成分と呼ばれる分離の前綴り，機能動詞と結合価で結び付く述語補足語としての目的語や比喩的な意味の場所の補足語が，ここでは語彙的述語部分としてまとめられている．さらに再帰動詞と結び付く再帰代名詞もここに含まれている．シュルツ／グリースバハでは目的語として扱われている[5]．

ドゥーデンでは，述語と補足語のまとまりを述語群[述部]（Prädikatsverband）と呼んでいる[6]．ここでの補足語は，動詞の結合価によって述語に結び付く要素，即ち構成的文肢（konstitutives Glied）で主語以外のものを言い，述語の上に述語群という上位概念を置いている点で論理学上の述語の概念により近いと言える．ドゥーデンでは次のような構成的文肢をもとに基本文型が組み立てられている．所有の与格も構成的文肢に含まれるが，ここでは省略する．



構成的文肢は，義務的（obligatorisch）なものと随意的（fakultativ）なものに分けられる．文例(8)と(9)における対格目的語は，共に構成的文肢で

あるが，(8)では義務的，(9)では随意的である．

(8) Der Gärtner bindet *die Blumen.*
(9) Der Bauer pflügt (*den Acker*). (Duden 1995, S.651)

このような場合，pflügen という動詞に関しては，binden と同じ文型，即ち［主語＋述語＋対格目的語］という文型が設定された上で，対格目的語は随意的であるというように規定される．

機能動詞結合にどういう文型が当てはまるのかということについては，特に説明があるわけではない．機能動詞が，それと結び付く要素と共に述語を成すという考え方はドゥーデンにも述べられているが[7]，複数の部分から成る述語の項目には挙げられていない．機能動詞結合は，機能動詞と結び付く要素がさらに補足語を必要としなければ，複数の部分から成る述語として扱わなくても，一般の動詞に関する文型を当てはめることが可能である．即ち，文例(10)には文型 2［主語＋述語＋対格目的語］を，(11)には文型14［主語＋述語＋対格目的語＋場所の補足語］を当てはめることができる．

(10) Die Besprechung nahm einen guten Verlauf.
(11) Man brachte die Sache in Ordnung. (Ibid., S.112)

しかし einen Einfluß auf jn. 〈et.[4]〉 ausüben や jn. 〈et.[4]〉 mit et.[3] in Verbindung bringen のような機能動詞結合においては，動詞的名詞の結合価による補足語の auf jn. 〈et.[4]〉や mit et.[3]は下位の補足語（シュルツ／グリースバハでは目的語）であるので，任意添加語（freie Angabe）として扱うことはできない．機能動詞とそれに直接結び付く要素を合わせて述語と見なさないのであれば，形容詞の場合と同じように，下位の補足語をもつ文型が設定されるべきである．形容詞の場合，文例(13)には文型27［主語＋述語＋様態の補足語＋下位の前置詞格目的語］が設定され，(12)の文型 9［主語＋述語＋様態の補足語］とは区別される．

(12) Die Rose ist schön.

(13) Der Laborant ist mit den Ergebnissen zufrieden.

(Ibid., S.681)

本試論では，目的語と任意添加語の語順を対象とするが，機能動詞結合と構成的文肢としての副詞は含めない．

2　基本語順とテーマ・レーマ分節の関係

「ドイツ語では述語以外の文成分は原則的に特定の位置に固定されない．」(ヘンチェル／ヴァイト　1994年　409ページ)定動詞(F)，定形でない述語成分（I），主語（S），目的語（O），副詞規定語（A）から成る文があるとすると，代名詞に関する制約を除外すれば，語順の可能性には次の六つがある[8]．

	前域		中域		
1.	S	F	O	A	I
2.	S	F	A	O	I
3.	A	F	S	O	I
4.	A	F	O	S	I
5.	O	F	S	A	I
6.	O	F	A	S	I

この6通りの中からどれを選ぶかの判断には，いわゆるテーマ・レーマ分節(Thema - Rhema - Gliederung)が必要になってくるが，比較的語順が固定している英語を学んだ後にドイツ語を学習する者にとって，特に初学者にとっては，任意に移動可能な文肢があるということ自体が捉え所のない現象として映るようである．独作文や和文独訳の際に必ずと言ってよい程なされる質問に,「ドイツ語には英語の5文型のようなものはないのか」というのがある．また，定形第2位の規則を確認するための練習として，文頭の要素を換えて文を書き換える練習をしていても，「それで文の意味はどう変わるのか」という方向に疑問が向けられることが多い．このような疑問は初歩的段階から生じて来るものであるので，それらを対象とする分野の位置付けが学校文法においても必要であると

思われる．それは，語順の問題に欠かすことのできないテーマ・レーマ分節をどのように文法に組み入れるかの問題でもある．

テーマ・レーマの概念が生まれたプラハ学派の立場は，言語を記号の体系として捉え，言語学を哲学，心理学，社会学などから独立した自律科学であるとする点では構造主義(Strukturalismus)と共通点をもっており，時期的にも構造言語学の発端となったので構造主義の一派に分類されることもある[9]．しかし，のちに自らの学説を機能言語学(Funktionale Linguistik)と称したように[10]，伝達機能から出発して体系を記述するという点で他の構造主義学派から区別される．プラハ学派で言語学が自律科学であると言うときは，言語記号と伝達機能の関係が自律的に記述されるという意味であり，それは「記号とは，それなしには記号が意味も存在理由をも失ってしまう言語外実在に対応する言語的相関物(Korrelat)である」(ヘルビヒ　1973年　49ページ)という考え方に基づいている．「言語はある目的（つまり伝達）に適合した表現手段の体系である」(大塚　1982年　645ページ右)ので，「機能(なによりも伝達機能)に関連をもつことなしには記述されない」(ヘルビヒ　1973年　48ページ)という立場をとる．プラハ学派は，ラングとパロールの区別を「ことさら強調したことは１度もない」(同上書48ページ)が，一方は他方の存在を必要とする相互依存関係にあり，ラングは具体的な発話(パロル)の基礎の上にのみ研究されうるという考え方では，ド・ソシュール(Ferdinand de Saussure)と共通点もある．

反対に，文法記述が発話から出発すると言うとき注意しなければならないのは，発話の形に対する標準的であるとか適格ではない等の判断が重要であるということである．語順の研究に機能言語学的手法をとっているレーネルツ（Jürgen Lenerz）も，文法構築のデータになりうる文(Satz)と実際に話されたり書かれたりしたものという意味での発話(Äußerung)を区別している[11]．発話には，明らかに誤りと分かり，データとして不適切なものもある．逆に，研究者によって作られた実際に発話されていない文でも，その言語を母語とする人の判断が結び付いた文はデータになりうる．

プラハ学派でいう体系は，伝達機能と相関関係にある体系なので，一

定の文脈(Kontext)との関係で記述される．例えば，文脈とアクセントを度外視した文例(1)は，それ自体はドイツ語文として文法的に正しいが，それのみを記述するのではなく，(2),(3)のように，文脈と標準的文アクセントがセットされた中で記述される．(„1“は第1文アクセントを，„§“は文自体は標準的であるが，与えられた文脈では不可能であることを，そして，„＊“は文法的に正しくない文を表す．)

(1) Ich habe das Buch gestern gelesen.

(2) a) Wann hast du das Buch gelesen?
(2) b) Ich habe das Buch gestern gelesen.
(3) a) Was hast du gestern gelesen?
(2) b) § Ich habe das Buch gestern gelesen.
(3) a) Was hast du gestern gelesen?
(3) b) ＊ Ich habe das Buch gestern gelesen. (Ibid., S.20)

文アクセントが異なる文，例えば上の(2) b)と(3) b)の関係については，プラハ学派内でも違いがあり，一つの文が，二つの異なる発話として現れたものとする見方と，二つの異なる文であるとする立場がある．レーネルツは後者の立場を取って，次のように説明している．「(2) b)は一定の文脈でのみ容認されるが，このような制限は，厳密に言えば（機能言語学的アプローチにおいては）文法的に正しい文のどれについても必要である．しかし，(3) b)は(2) b)から文アクセントによってのみ区別されるが，(3) a)の文脈だから容認されないのみならず，どんな文脈においても容認されない．このような文は非文法的であると見なされる．従って，(2) b)と(3) b)は二つの異なる文である．」(Ibid., S.20f.)

機能言語学派は，言語を機能から出発して記述するという共通の関心から集まったグループであり，音韻論から統語論までを包括する文法モデルを打ち出したり，共通の方法論をもっていたわけではなかったが，言語の諸要素間の観察方法としてヤコブソン(Roman Jakobson)が「対立」の概念を取り入れてから，音韻論，形態論，統語論というさまざまなレベルに応用され，二項対立の考え方がプラハ学派の特徴になってい

った[12]．それが統語論においては，テーマ・レーマ分節という方法に現れている．テーマ・レーマの概念は研究者によって少しずつ違いがあり，それに伴って新たな術語が用いられるようになり[13]，伝統的な意味での統語論という分野に組み入れられない面も出てきた．テーマ・レーマ分節を統語論の対象にするかどうかということについては，次のような二つの方向に分けられるであろう．

1．テーマ・レーマ分節は，発話レベルの問題であるので，パロールあるいは言語能力を研究の対象とする文法の枠組では，統語論の対象とはならず，テクスト言語学や語用論といった領域の対象である．

2．文肢内部の規定関係である付加語の位置に標準的なパターンがあるように，文肢の位置に関しても基本語順といえるようなものが個別文の内部で自律的に示しうるのでなければ，語順を決める要因は，（そのひとつであるテーマ・レーマも）統語論の対象になる．

どのような立場を取るかは，何を目的とするかということの他に，対象言語の性質にもよると思われる．テーマ・レーマによって統語構造が決定されるという立場のFSP（機能的な文パースペクティブFunktionale Satzperspektive）は，マテジウス(Vilém Mathesius)によって導入されたが[14]，その母体であるチェコ語が語順の自由な言語であったということの影響は大きいであろう．語順がかなり固定している英語でFSPが展開されたとき，テーマ・レーマは語順の変化だけで表されるのではなく，もとの表現形式とは別の手段が必要となることが示された．例えばチェコ語でテーマとしての目的語が前に置かれるような場合，英語では受動態が利用されることが多いなどである[15]．意味論的（文脈的）な要素によって語順が決定される言語なら2．の立場に，標準的な語順が固定している言語では1．の立場に立つ動機になり易いと思われる．ドイツ語は，述語（定動詞と述語成分）の位置は決まっているが，他の文肢の位置は基本的語順と意味論的（文脈的）要素の兼ね合いで決まるので，そのような関係を統語論に位置付けるのが望ましいと思われる．

テーマ・レーマの概念の違いによっても対象範囲は変わってくる．テーマ・レーマ分節の先取りともいうべき「ベハーゲルの第2の法則」は，より重要な要素がそうでない要素より後ろに位置するというもので，古

いもの（既述情報）と新しいもの（未知情報）という概念で置き換えられることもある．しかし，文脈により明らかに既知と見なされる情報に焦点が合わされることもあり[16]，主観的な判断に基づく情報の価値判断と文脈から客観的に判断できる新旧情報とは必ずしも一致しないので，その両者を含めるのか，あくまでも文脈と関係付けるのかによって，テーマ・レーマの概念も異なったものになる．しかしいずれにしてもテーマ・レーマは，文脈との係わりがなくては成り立たない概念である．そこでテーマ・レーマ分節をテキスト言語学的ではなく，できる限り個別文で議論できる統語論に組み入れるという立場で，文脈自体の概念を広義と狭義に分けたいと思う．

文脈に関して，発話レベルにおける前後関係，即ち，実際に書かれたり，話されたりしたものに基づくものを「狭義の文脈」とする．一般的に「文脈」という時の概念である．それに対して，論理的規定関係，即ち意味上の文に基づくものを「広義の文脈」とする．意味上の文脈は実際の形を取って，即ち狭義の文脈によって明示されうるが，必要条件ではない．そのような関係は，文脈以前のレベルにも当てはまることなので，文と冠詞のレベルを例に取って確認しておきたい．

「AはBである」という直説法・現在形の文は，意味論的解釈では「AがBであるということは現在の事実であるということを私も認めている」というように内包化されるが，個別言語において，そのすべてが統語的分節によって表現されるわけではなく，ドイツ語では法・時制として動詞に組み込まれている．そして，それだけでは表現できない場合や，明示することが必要な場合に，時を表す副詞や上位文の形で表現される．

冠詞のレベルで定冠詞を例に取ると，定冠詞は，それが冠せられた名詞によって表される概念の対象が識別可能（identifizierbar）で特定的(spezifisch)であることを表す機能がある[17]．どのように特定化されるかは，付加語，関係文，既出文などの具体的な言語手段（狭義の規定）によって示す必要のある場合もあるが，ない場合もある．名詞の概念の対象となるものが現実に一つしか存在しない場合や，概念自体が言語共同体において一つの共通のものと見なされる場合である．このような概念は，関口文法の冠詞論[18]では「通念」と呼ばれており，広義の規定により

特定化される概念である．

以上のことを踏まえて，テーマ・レーマ分節に関しても，狭義の文脈で観察できるものと，広義の文脈に係わる場合を区別することが必要と思われる．広義の文脈をどう設定するかについては，文脈的拘束性を示す手法として定着している疑問文によるテスト(Frage - Test)を応用するのが良いと思われる．それは，以下のように疑問代名詞を用いて何がレーマになっているかを示すやり方であるが，それ以外の要素は相対的にテーマと見なされる．

(4) a)　Von wem bekam er das Buch?
(4) b)　Er bekam das Buch von einem Kollegen.

レーネルツは(4) b)の文について，(4) a)の文に対する自然な答え方としては，テーマである直接目的語は代名詞化されるので，その点の考慮が必要であることを述べているが[19]，疑問文を発話レベルに限定せず，広義の文脈として扱えば，問題はないように思われる．ヘンチェル／ヴァイトにおいて，「テーマというのは，背景となる情報のことで，理解を保証するためにどの文にも与えられている．そして，それは，聞き手がすでに知っていることであったり，知っていることが前提とされていたりする．」(Ibid., 420ページ) と述べられている．「背景となる情報」が狭義の文脈に基づくものかどうかについては直接言及されているわけではないが，Er hat seinen Freunden eine Geschichte erzählt.という文について「不定冠詞は Geschichte「物語」という語がこれまでに述べられていなかったということを示している．したがって，この文では「物語」というのが新情報，すなわちレーマなのである」(Ibid., 420ページ)と述べられており，逆に文から文脈を想定できることが示唆されている．聞き手の質問として発せられたものでなくても，「何がどうしたのか」とか，「いつどういう出来事があったのか」という文脈が想定できる．だだし，文脈が想定できるということと，それが語順などの形式的なものにとって，どこまで必要か，あるいはどれだけ必要かということは別である．広義の文脈を「心理的」なものとして極端に主観的な内容のものを想定する

ことは，規範的な語順体系を組み立てる上では混乱を招くばかりで意味がない．通常の発話において，頻度的にも一般的と言い得るような文脈を想定することが必要であろう．

ドイツ語の語順のように固定した面と自由な面をもつ言語における語順体系は，基本文型とテーマ・レーマという二つの基準，さらに他の要因があればそれを含めたものの間の強弱の体系ではないだろうか．語順の容認可能性(Akzeptabilität)についてレーネルツは，次の(5) a) ,b)の文について，b)の逸脱性の感じ方は個人によって違うかもしれないが，(5)の文脈ではb)はa)にくらべて「より普通ではない(weniger normal)」という点で判断が一致することが重要であると述べている．

(5)) Wohin hast du das Buch gelegt?
(5) a) Ich habe das Buch auf den Tisch gelegt.
(5) b) * Ich habe auf den Tisch das Buch gelegt.

上の意味で判断が一致するということは，語順に係わる要因に一定の序列があって，ドイツ語を母語とする人は，それを直感的に判断していると思われる．一般にテーマはレーマの前に置かれるので[20]，(5) a)では，レーマであるauf den Tischが，テーマであるdas Buchより前に位置しているため逸脱していると判断される．しかし，Was hast du auf den Tisch gelegt?という文脈なら，das Buchがレーマでも Ich habe das Buch auf den Tisch gelegt.は容認されるということから判断すると，この場合の要因はテーマ・レーマより直接目的語＋場所の補足語という基本文型の方が強いと言えるであろう．語の意味自体が要因となる場合もある．冠詞では，不定冠詞はそれ自体がレーマ性の強い語であり，逆に定冠詞はそれ自体でテーマ性の強い語である．文の背景となる時・場所の副詞もテーマ性が強い．語順は，それらの要因の大きさの順序と共に体系化する必要があると思われる．

3　規範的語順の設定について

許容される文かどうかということと，文体的に良いかどうかというこ

とは区別されるべきであるが，後者の判断は前者の研究によって裏付けられる．ドイツ語学習者の言語学的な興味ということにしても，ある現象を面白いと感じるのは，規範的なものが分かっているからで，それを習熟する前にいろいろと提示されても混乱するばかりである．その意味で，移動しうる文肢をはじめ，外国語としてのドイツ語で文章を組み立てる際に問題となるさまざまな事柄に関して，いろいろな可能性の中から規範となりうるものを抽出する作業が必要であろう．その際，テーマ・レーマ，定冠詞・不定冠詞，代名詞化，文アクセント，文域といった部分的に相互関係にあるものを，さらに語順に関係付ける際に，それらを混同しないようにする必要がある．以下の疑問文と答えの文は，上に述べたように，実際の受け答えではないので，答えの文には代名詞を用いない．文アクセントは標準的(normal)なものとする．強調的(emphatisch)あるいは対照的(kontrastiv)なアクセントは，人称代名詞の位置ですら自由になるほどの要因であるので[21]，標準的な語順の対象とはしない．文域については，中域を対象とする．前域にテーマ要素を置いた場合は，あまり語順の問題が起きないという実際的な理由と，レーマがテーマの前に位置する場合を，前域と中域の場合に分けて述べる必要が出てくるからである．テーマ・レーマと定冠詞・不定冠詞については，その間に密接な関係があるが，必ずしも対応するわけではない．

(1) Wem hast du ein Buch geschenkt?
(1)a) Ich gabe dem Nachbarkind ein Buch geschenkt.
(2) Was würdest du einem Schornsteinfeger schenken?
(2)a) Ich würde einem Schornsteinfeger ein Buch schenken, aber leider kenne ich keinen. (Lenerz 1977, S.52ff.)

(1)の「本 (Buch)」は識別不可能なので不定冠詞付きで表現されている．(1) a)では，特定の識別可能な1人である「隣の家の子 (Nachbarkind)」がレーマであるので定冠詞付きである．(2)の Schornsteinfeger に添えられた不定冠詞は，仮構性[22]を含んでいると考えられる．「煙突掃除夫にあげるとしたら」という前提条件はテーマに属する．

レーネルツは，基本語順とそうでないものの区別に，無標(unmarkiert)・有標(markiert)という概念を応用している[23]．それは，文肢A，Bが，A—Bという語順でもB—Aという語順でも現れることができるが，B—AはA—Bにはない制限を受けるとき，A—Bは無標，B—Aは有標とするものである

冠詞類は限定性条件(Definitheitsbedingung)という形で語順に制限を加える[24]．これは二つの名詞句A，Bに関して，B—Aという語順はA—Bという語順に対して，前に位置する要素，即ちBが「限定的」(definit)でなければならないという点で制限されるというものである．ここで注意しなければならないのは，「定・不定」の概念である．定冠詞，不定冠詞という形態に関係する場合は，それぞれ bestimmt, unbestimmt という術語で表され，意味に関係する場合は definit, indefinit という術語で表される．冠詞の意味に関係するものとして他に「特定」(spezifiziert)，「種類」(generisch)がある．それで表現すると，不定冠詞は限定的な対象以外の3種の対象を表しうる[25]．この場合は，識別可能・識別不可能という対立概念は分化されていない．いずれにしても，不定冠詞によって表される特定性と不(特)定性は語順には影響がないので，「限定されていない」(nicht-definit) という概念で統一される．限定的なものには定冠詞の他，定冠詞類と所有代名詞が含まれる．冠詞(類)以外で，数詞や不定代名詞は，限定されていない概念として扱われる．ただし beide は die zwei の意味なので限定されているとみなされる[26]．

テーマ・レーマも語順に制限を加える．有標の語順B—Aでは，Bがレーマ(あるいはAより強いレーマ)であってはいけないという制限で，テーマ・レーマによる制限(Thema-Rhema-Bedingung)と呼ばれる[27]．ここまでをまとめると次のようになる．(„T“はテーマ，„R“はレーマを表す．)

無標の語順A—Bの場合:T—RとR—Tのどちらも表現できる．限定詞の種類に制限はない．

有標の語順B—Aの場合:T—Rが表現され，無標の語順よりRが効果的になるが，Bは限定的でなければならない．R—Tは不可．

他に，文肢の長さによる制限(Gesetz der wachsenden Glieder)と，第2の述語成分による文枠の有無による制限(Satzklammerbedingung)もあるが，この2つは同時に重ならない限り，限定性条件とテーマ・レーマによる制限より弱いことが示されている[28]．(3) b)では，長い文肢(与格)が短い文肢(対格)の前に現れ，かつ，文末は第2の述語成分がないという意味で枠がないため逸脱性が感じられる．もし対格目的語が与格と同程度に長いか，より長ければ，逸脱性はない．(„??“は逸脱性をどの程度のものに感じるかを表す記号で，弱いものから順に?,??,?＊)

(3) Wem widmest du dieses Buch?

(3)a) Ich widme dieses Buch den vielen überaus hilfreichen Kollegen, die durch ihre Kritik erst seine Entstehung ermöglicht haben.

(3)b)?? Ich widme den vielen überaus hilfreichen Kollegen, die durch ihre Kritik erst seine Entstehung ermöglicht haben, dieses Buch.

(4) Wem hast du dieses Buch gewidmet?

(4)a) Ich habe dieses Buch den vielen überaus hilfreichen Kollegen gewidmet, die....

(4)b) Ich habe den vielen überaus hilfreichen Kollegen, die durch ihre Kritik erst seine Entstehung ermöglicht haben, dieses Buch gewidmet. (Lenerz 1977, S.61)

これらの制限は，R—Tが可能な無標の語順にしか関係しない．(3) b)でdieses Buchにレーマがある場合や有標の語順では，テーマ・レーマによる制限のみで判断できるからである．

以上を踏まえ，語順の規範化を試みると次のようになる．

第1段階　任意添加語を含まない場合

1．無標の語順を基本語順A—Bとして示す．授与動詞の与格(ＩＯ)と対格（ＤＯ）ならばIO—DOになる．

2．個別文肢をレーマにした広義の文脈を想定する．述語全体をレーマにすると両方の目的語の冠詞を同時に考慮しなければならず，また，狭義の文脈だと代名詞化の問題が加わるからである．

Bがレーマ：無標の語順で表す．

Was schenkst du dem Schüler?

「その生徒には何を贈りますか」

Ich schenke dem Schüler ein $\overset{1}{\text{Buch}}$/das $\overset{1}{\text{Buch}}$.

Was schenkst du einem Schüler?

(Was würdest du einem Schüler schenken?)

「(友人などではなく)生徒には何を贈りますか」

Ich schenke einem Schüler ein $\overset{1}{\text{Buch}}$/das $\overset{1}{\text{Buch}}$.

Aがレーマ：Bが限定的なら有標の方が良い．

Wem schenkst du das Buch?

「その本を誰に贈りますか」

Ich schenke das Buch einem Schüler/dem Schüler.

Wem schenkst du ein Buch?

(Wem würdest du ein Buch schenken?)

「本を(贈るとしたら)誰に贈りますか」

Ich schenke einem Schüler/dem Schüler ein Buch.

Aがレーマの場合，レーネルツは無標の語順でも大差ないとのべているが，文体的には有標の語順の方が良いとしている[29]．他にAがレーマでBが特定的なら有標の方が良いとする理由は，上で述べたように，文肢の長さによる制限と文枠の有無による制限を考慮する必要がなくなるということが挙げられる．

3．述部全体がレーマになる文脈を想定し，基本語順で表す．

Was machst du?

Ich schenke dem Schüler/einem Schüler ein Buch.

Ich schenke dem Schüler/einem Schüler das Buch.

第2段階　任意添加語を含む場合

任意添加語相互間の基本的語順には次のような一定の規範がある．

時　因由　場所　様態　（ヘンチェル／ヴァイト　411ページ）

時　因由　様態　場所　（シュルツ／グリースバハ　540ページ）

しかし，目的語と組み合わせられて現れる場合の語順は，大ざっぱに示されることはあっても，規範とまでは言えない場合が多いように思われる．例えばシュルツ／グリースバハでは次のように示されている[30]．

P^1—s—oa—do—S—A—Od—Oa—op—Op—P^2

実際的には，狭義の文脈によってテーマ要素としての目的語は代名詞化されていたり，前域との兼合いから複数の代名詞でない目的語と複数の任意添加語が文の中域に現れることが少ない割りに規範化するには複雑すぎるという面がある．時・場所の副詞（それぞれ TEMP, LOC で略記）と与格・対格の順序を例に取ると，レーネルツは，目的語が一つか二つかでも基本語順が変わることを示している[31]．

一つの場合

無標：　TEMP—IO　　DO—LOC

有標：　IO—TEMP　　LOC—DO（LOC が主語にかかる場合のみ可）

二つの場合

（無標）　TEMP—LOC—IO—DO

（有標）　　×

(5)a)　Ich habe gestern in Berlin meinem Freund ein Buch geschenkt.

(5)b) ＊ Ich habe gestern meinem Freund ein Buch in Berlin geschenkt.

TEMP—IO—DO—LOC は LOC が義務的文肢の場合の語順になる．

(5)c)　Ich habe gestern meinem Freund ein Buch nach Berlin geschickt.

(5)d) ＊ Ich habe gestern nach Berlin meinem Freund ein Buch geschickt.　(Lenerz 1977, S.88)

これらにはアクセント記号が付けられていないが，LOC がもはやテーマ・レーマによって移動しうる文肢ではないことを表している．(5) b) が非文ということは，in Berlin をレーマとして表せないということを意味しているが，ein Buch の不定冠詞の影響も考えられるのではないかと思われる．つまり，有標の語順B－AでBが meinem Freund ein Buch，A が in Berlin だとすると，B に限定的要素が来なければならないという限定性条件に反してしまう．(6)で任意添加語の schlecht が IO—DO の後ろに位置しているのは，副詞の意味的種類によるものなのか，IO—DO が限定的だから可能なのかは今後も観察しなけらばならない．

(6) Aber Autonationen wie Amerika, Deutschland und Japan können den ärmeren Ländern den Kauf von Autos schlecht verbieten[32].

与格，対格，任意添加語（fA で略記）相互間の語順から規範的要素を抽出するには，次のような手順により，どんな種類の添加語が fA の位置に現れうるかを調べる必要がある．

1．IO，DO のどちらか一つがレーマとなる文脈を想定する，片方が(最も強い）レーマであるためには，他の二つは無標の語順が良い．

Was schenkst du fA dem Schüler?

Ich schenke fA dem Schüler ein Buch/das Buch.

Wem schenkst du fA das Buch?

Ich schenke fA das Buch einem Schüler/dem Schüler.

2．IO，DO のどちらか一つがテーマとなる文脈を想定する．他の二つ全体がレーマであるためには，それらの間の語順は無標の方が良い．

Was ist mit dem Buch?

Ich schenke das Buch fA dem Schüler.

ただし，Was ist mit einem Buch?

Ich schenke fA dem Schüler ein Buch.（限定性条件により）

Was ist mit dem Schüler/einem Schüler?

Ich schenke dem Schüler/einem Schüler fA ein Buch/das Buch.

3．fA がレーマとなる語順を想定する．IO，DO が二つでテーマを成すためには，それらの間では無標の語順が良い．

Wann/Warum/Wie/Wo schenkst du dem Schüler das Buch?

Ich schenke dem Schüler das Buch fA.

4．fA がテーマとなる文脈を想定する．IO—DO が二つでレーマを成すためには，それらの間では無標の語順が良い．

Was machst du fA?

Ich schenke fA dem Schüler ein Buch/das Buch.

注

1 D．シュルツ／H．グリースバハ 『ドイツ文法』 稲木勝彦他訳 1983年 三修社 431ページ以下．

2 E．ヘンチェル／H．ヴァイト 『現代ドイツ文法の解説』 西本美彦他訳 1994年 同学社 324ページ以下．

3 Duden : *Grammatik der deutschen Gegenwartssprache* (=Duden Bd.4). 5., völlig neu bearb. und erw. Aufl., hrsg. und bearb. von G. Drosdowski u. a., Mannheim 1995, S.605ff.
シュルツ／グリースバハ 1983年 445ページ以下．
Helbig, Gerhard/Buscha, Joachim : *Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht,* Leipzig 1970 ; 17. Aufl. 1996, S.536ff.

4 ヘンチェル／ヴァイト 1994年 326ページ参照．

5 シュルツ／グリースバハ 1983年 178,536ページ．

6 Duden 1995, S.651.

7 Ibid., S.112.

8 ヘンチェル／ヴァイト 1994年 410ページ．6通りの語順を示す順序は変えてある．

9 G．ヘルビヒ 『近代言語学史』 岩崎英二郎他訳 1973年 白水社44ページ以下．

10 大塚高信他監修 『新英語学辞典』 1982年 研究社 645ページ右．

11 Lenerz, Jürgen : *Zur Abfolge nominaler Satzglieder im Deutschen,* Tübingen 1977, S.17ff.

12 ヘルビヒ 1973年 55ページ以下．

13 Bußmann, Hadumod : *Lexikon der Sprachwissenschaft,* Stuttgart 1983, S. 541 及び Lenerz 1977, S.11ff.

14 ヘルビヒ 1973年 56ページ.

15 大塚 1982年 460ページ, 651ページ左.

16 Lenerz 1977, S.11.

17 ヘンチェル／ヴァイト 1994年 211ページ以下.

18 関口存男 『冠詞』 1960年, 第5版 1978年 三修社 第一巻・定冠詞篇 393ページ以下.

19 Lenerz 1977, S.12.

20 大塚 1982年 460ページ. マテジウスによるとテーマ（T）とレーマ（R）の並ぶ順序は, „T－R“が通常の順序で, 客観的順序と呼ばれる. Rに特別の強調が加わる場合などでは, „R－T“で現れることもあり, 主観的順序と呼ばれる.

21 Lenerz 1977, S.56ff.

22 関口存男 1978年 第二巻・不定冠詞篇 520ページ以下.

23 Lenerz 1977, S.27.

24 Ibid., S.50ff.

25 Ibid., S.48.

26 Ibid.. S.55f.

27 Ibid., S.42ff.

28 Ibid.. S.58ff.

29 Ibid., S.61.

30 シュルツ／グリースバハ 1983年 541ページ. P^1, P^2は第1述語成分, 第2述語成分；S, Od, Oa, Op, Aは主語, 与格目的語, 対格目的語, 前置詞つき目的語, 任意添加語を表す. 小文字による表記は代名詞を表す.

31 Lenerz 1977, S.85ff.

32 R. イェッスル／石井寿子 『科学を読もう』 1996年 朝日出版社 47-48ページ.

Zur Bestimmung der normativen Abfolge von nominalen Objekten und freien Angaben

Chiko HANEDA

Inhaltsübersicht :

I Die Kategorisierung der Satzglieder und ihre Problematik
II Die Beziehung zwischen der Satzgliedstellung und der Thema-Rhema-Gliederung
III Zur Bestimmung der normativen Satzgliedstellung

Die deutsche Wortstellung hat zwei Seiten. Das Prädikat nimmt eine feste Position im Satz ein, während die anderen Satzglieder unter verschiedenen Bedingungen umgestellt werden können. Unter anderem spielt die Thema-Rhema-Gliederung eine große Rolle. Das Thema steht vor dem Rhema. Aber es gibt Sätze, in denen das rhematische Glied nicht nach dem thematischen stehen kann, und auch Sätze, in denen das rhematische Glied nicht nach dem thematischen zu stehen braucht. Dabei spielt eine andere Bedingung mit. Bei der Aufsatzschreibung fällt es jedoch einem Nicht-Muttersprachler manchmal schwer zu entscheiden, wie viele Abfolge von Gliedern möglich sind, und welche im gegebenen Kontext stilistisch am besten ist. Dazu reicht eine formbezogene Grammatik nicht aus. Deshalb halte ich für notwendig, stilistisch gute Abfolge der Glieder zu bestimmen.

Im ersten Kapitel habe ich die Kategorisierung der Satzglieder und ihre Benennung in den Grammatiken von Duden, Schulz/Gließbach und Helbig/Buscha durchgesehen und die Notwendigkeit empfunden, zur Erklärung der Satzgliedstellung für die japanischen Deutsch-

studierenden einheitliche Termini zu bestimmen.

Im zweiten Kapitel wird anhand der Arbeit von J. Lenerz „Zur Abfolge nominaler Satzglieder im Deutschen“ untersucht, wie die Thema-Rhema-Gliederung in die Syntax eingeordnet werden soll. Die Bewertung eines Satzes daraufhin, ob die Glieder in einer normalen Abfolge erscheinen, ist genaugenommen nur in bestimmten Kontexten möglich. Deshalb wird die Einwirkung der Thema-Rhema-Bedingung auf die Abfolge der Satzglieder oft auf der Ebene der Äußerung untersucht und für einen textlinguistischen Gegenstand gehalten. Aber es ist m.E. eine syntaktische Aufgabe, die Faktoren, die die Abfolge der Glieder bestimmen, nach ihrer Einwirkung abzustufen und zu beschreiben, welcher von den Faktoren in welchem Fall am stärksten wirkt.

Als Bewertungsverfahren wird der Fragetest benutzt, der es ermöglicht, die Glieder eines Satzes kontextuell zu binden. Ich schlage vor, den Begriff des Kontextes nicht auf eine konkrete Bedeutung zu beschränken, sondern auch für Einzelsätze einen semantischen Kontext vorauszusetzen. Dadurch wird es möglich, die Glieder, die eine Neigung haben, im Vorfeld eines Einzelsatzes zu stehen, soworl grammatisch als auch semantisch zu begründen. Am Anfang eines Satzes steht z. B., obwohl kein konkreter Kontext, oft eine Temporalangabe. Dabei kann man einen semantischen Kontext voraussetzen : „Wann spielt das?“ Bei einem Satz, der mit dem Subjekt anfängt, wird vorausgesetzt : „Was macht die betreffende Person?“ u.a.

Im dritten Kapitel wird gezeigt, mit welchem Verfahren eine stilistisch gute Abfolge zu bestimmen ist. Dabei behandle ich aus praktischen Gründen nur die Satzgliedstellung der Sätze, die mit dem Subjekt anfangen, denn bei den Sätzen, die mit thematischem Glied außer dem Subjekt anfangen, entstehen keine größeren Probleme als bei den ersteren. Nach Lenerz gibt es vier Faktoren, die Einfluß auf die Abfolge zweier NPs haben : Thema-Rhema-Bedingung, Definit-

heitsbedingung, Gesetz der wachsenden Glieder und Satzklammerbedingung. Die ersten zwei Faktoren sind wichtiger als die letzteren zwei, weil diese ohne Zusammenwirkung weniger stark sind als jene. Die Definitheitsbedingung gilt unabhängig von der Thema-Rhema-Bedingung. In Anbetracht dieser Abstufung der Faktoren wird eine sinnvolle Abfolge von IO und DO bestimmt :

1. Unmarkierte Abfolge IO DO (im Sinne von Lenerz) gilt als Grundwortstelllung.
2. Ein Kontext, in dem eins von IO und DO Rhema ist, wird vorausgesetzt. Bei rhematischem DO wird die Abfolge IO DO als gut bezeichnet, bei rhematischem IO dagegen, wenn DO definit ist, die Abfolge DO IO.
3. Ein Kontext, in dem IO und DO als Ganzes Rhema ist, wird vorausgesetzt. Dabei wird die Abfolge IO DO als gut bezeichnet.

Um eine gute Abfolge von IO, DO und einer freien Angabe (=fA) zu bestimmen, ist es nötig, durch folgendes Verfahren zu untersuchen, was für Angaben die Stelle fA annehmen können :

1. Ein Kontext, in dem unter IO und DO eins von beiden Rhema ist, wird voraus gesetzt. Dazu werden die anderen zwei in ihre unmarkierte Abfolge fA IO oder fA DO gestellt.
2. Ein Kontext, in dem unter IO und DO eins von beiden Thema ist, wird vorausgesetzt. Damit die anderen zwei als Ganzes Rhema ist, werden sie in ihre unmarkierte Abfolge fA IO oder fA DO gestellt.
3. Ein Kontext, in dem fA Rhema ist, wird vorausgesetzt. Damit wird fA nach der thematischen Folge IO DO gestellt.
4. Ein Kontext, in dem fA Thema ist, wird vorausgesetzt. Damit wird fA vor die rhematische Folge IO DO gestellt.